『敦煌寫本研究年報』第五號（2011.03）81-94 頁

羽039Vを中心とした變文資料の再檢討*

玄幸子

一、はじめに

「變文」とは何か？ この問題は、敦煌文書發見時より長らく大きな問題として取り上げられ、多くの專門家から種種さまざまな見解が提示されてきた。1957 年に人民文學出版社から『敦煌變文集』が出版された後も、各々の主張に基づいて書名に「變文」を冠する多くの專著がさまざまな角度からの再改編を經て出版されている。近年の代表的なものとして、項楚著『敦煌變文選注』[1]、潘重規著『敦煌變文集新書』[2]、黃征, 張涌泉校注『敦煌變文校注』[3]などが擧げられる。現在では「變文」とは廣義には敦煌文書中の俗文學全般を含み、狹義には韻散混交體を主とする說唱體の俗文學を指すというのが一般的なとらえ方であろう。

一方、中唐俗文學の代表ともされる變文が當時實際かなり流行していたことは、白居易と張祜の應報において目連變に言及されること[4]や、唐代吉師老の〈看蜀女轉昭君變〉詩[5]などからも既に明らかなこととして確認されている。ただ、實際こ

---

*本稿は西陲發現中國中世寫本研究班夏季大會（2010 年 8 月 11 日）での發表を加筆修正したものである。當日班長はじめ班員諸氏から貴重なご意見を頂戴した。また校錄については俄藏會輪讀の席上で諸氏から有益なご示教を頂戴した。ここに記し改めて謝意を表すものである。本稿はまた日本學術振興會科學研究費補助金「ロシアに所藏される敦煌吐魯番等發見漢文文獻の研究」（基盤研究 B、研究代表者：高田時雄京都大學人文科學研究所教授）による研究成果の一部である。

[1]巴蜀書社、四川大學古典文獻研究叢刊 5、1990 年；增訂本、中華書局、2006 年。

[2]文津出版, 1994 年。

[3]中華書局, 1997 年。

[4]夙に倉石 1939、432-440 頁で言及される白居易と張祜の應報は下記、王定保『唐摭言』に基づく。張處士憶柘枝詩曰：鴛鴦鈿帶拋何處，孔雀羅衫屬阿誰。白樂天呼爲問頭。祜矛盾之曰：鄙薄問頭之誚所不敢逃。然明公亦有目連變。長恨詞云：上窮碧落下黃泉，兩處茫茫都不見。此豈不是目連訪母耶？（〔唐〕王定保『唐摭言』卷十三）

[5]吉師老四首 其二「看蜀女轉昭君變」

妖姬未着石榴裙　自道家連錦水濆
檀口解知千載事　清詞堪嘆九秋文
翠眉嚬處楚邊月　畫卷開時塞外雲
說盡綺羅當日恨　昭君傳意向文君（〔五代〕韋穀撰『才調集』卷八「古律雜歌詩一百首」）

の 2 例の現存する資料を見るだけでもその文體や内容に關してはかなり廣範圍に雜多な要素を含んでいただろうと豫想でき一概に論ずることはできない。

ここで取り上げる「舜子至孝變文」は口語性の強い散文體で書かれており一般に韻散混交文とされる變文の文體特徴から乖離しているため、「變文」を定義する際に早期より注目されてきた[6]。近年の概論書である Mair 1989 においても次のように指摘する。

> Except for two short poems, the Tun-huang story of the extreme filial piety of the legendary Shun as a boy is written entirely in prose. Unless one assumes that the verse has simply been omitted, this poses problems for a definition of pien or pien-wen that specifies the prosimetric form as an essential characteristic. The two manuscripts, S4654-354 and P2721-52, respectively, have a head title and an end title which identify the story as Shun-tzu pien i chuan 舜子變一卷 and Shun-tzu chih-hiao pien i chuan 舜子至孝變文一卷. The text also lacks the pre-verse formula and any other implicit or ostensible references to illustrations. The language and style resemble less those of the majority of works I have been considering than they do those of the wholly prose narrative such as the story of Ch'iu Hu 秋胡 and Hui-yuan 惠遠 (this latter is simply designated on the manuscript [S2073-283] as a "Tale [hua] of the Honorable [Hui-]yuan of Lu Mountain" 廬山遠公話) The Shun-tzu text differs so radically from the first group of pien-wen, in fact, that we are tempted to declare either that it constitutes a case of mislabeling or that it represents a loose usage of the term. (p. 25)

表題をつけ誤る、或いは「變（文)」というタームを嚴格に用いていないケースだと思わせるほどに特異な例として說明されているのであるが、本論でとりあげる羽 039V[7]によって「舜子至孝變文」の成書過程の一つのケースを非常に具體的に考察することができる。なぜ韻散混交文にならなかったのか、變文というものを

[6]「舜子變文」の文體研究に荒見 2010 がある。先行研究をまとめ「變文」というタームの文學史上の位置づけも確認したうえで、顏廷亮 1993 の"變文中, 只有『舜子變』通篇大體爲六言韻語, 體近故事賦。"をうけ、さらに進めて S.4654,P.2721V が六言の賦體から發展したと結論付ける。當該論文では、一部『孝子傳』との關連についても言及するが、本稿で檢討する羽 039V により別の角度から檢討できよう。

[7]『敦煌祕笈』影片册一、265-269 頁、杏雨書屋、2009 年

どのように當時とらえていたのか、などについても大きなヒントを與えてくれる。以下に資料の詳細を記述した上で、「舜子至孝變文」の一形成過程について檢討する[8]。

二、羽 039V 書寫狀況と錄文

羽 039V に關する敦煌祕笈目錄[9]の記載から題目を拔書きすれば下記の通りである。問題となる紙背には 6 種類の資料が順に從って書寫されるのではなく時間を前後して空白部分に上書きされており、複數資料が混在している。

三九 R　　七階佛名經
三九 V 一　般若波羅蜜多經經題
三九 V 二　金光明寺主惠登書狀習字
三九 V 三　舜子變
三九 V 四　大般若波羅蜜多經經題
三九 V 五　般若波羅蜜多心經
三九 V 六　禮懺文

書寫順を類推すると次の順で書寫されたと考えられる。錄文を「　」内に併せて記す。／は改行箇所、(　) は校定結果、□は判讀不能を示す。

1. 般若波羅蜜多經經題および本文の一部
「般若波羅蜜多經一卷／如是我聞一時薄伽梵住王舍城鷲峯山中舉 (峯) 大□ (苾)」

2. 金光明寺主惠登書狀および習字（「百行章一卷」など雜寫）
「冬極寒 伏惟慈父□／說心地經空中有个女子／信行章第六／金光明寺主惠登 狀／右伏以惠登末□無才去載／右 右件施捨 乃及／乃及／ 及及／及說也用能及及／也 也 □ 世尊妙／右件捨施所申意者奉／ 13[10]百行章一卷 杜正論 (倫) ／ 15 臣察三墳廓遠　誰／ 17 世尊 金光／ 19 即食服下□清淨地藏／ 22 大般若波羅蜜多經／ 23 尒時世尊從三昧起告觀／ 24 自在／ 40 般若波羅蜜多心經一卷／ 41 如是我聞一時薄伽梵住王舍城／ 42 鷲峯山中與大苾芻衆及／ 43 諸菩薩訶摩薩俱」

3. 舜子孝子故事・舜子變および他の孝子故事

[8]羽 039 に關しては先行研究として湯谷 2004 がある。當該論考において既に錄文、孝子傳との比較など詳細な檢討が行われているが、基づいた資料が不鮮明だったことにも起因し些か不十分な點が認められる。今回初めてカラー寫眞による公開がなされ、新たに得られた知見もあるので、改めて取り上げ檢討する。
[9]『敦煌祕笈』目錄册、22-23 頁、杏雨書屋、2009 年（影片册一、258 頁、263-264 頁再掲載）
[10]内容にかかわらず資料全體の行數に通し番號を付し、3、4 錄文にかかわる部分のみ明示する。

（錄文は後掲する。）

4. 詠神龜詩[11]

「81 詠神龜／ 海中有神龜 鳥擊共相隨 遊於世間故 看眾人／不知　道鳥銜牛粉(糞) 口稱我是龜 不能認 (忍) 口舌／ 撲煞殘死屍 代薄時僥當此時 習惡煩多見苦番／ 歷起留人徒度世 猶如撲煞頭神龜」

「三九Ｖ六 禮懺文」は上下逆に記されており、上記１～４との書寫の前後は判斷できない。次に３の錄文を記す。同一人の手になるが、墨色から同一時に書寫されたのではないと思われる部分がある。詳細を以下に記す。

【錄文】3. 舜子孝子故事・舜子變および他の孝子故事[12]

（舜子孝子故事）

11 昔舜子者異 (冀) 邑人也。 早喪[13]慈母，瞽取後妻。妻譖其夫，

12 頻欲煞舜，令舜濤井，以石壓。 帝釋照見，東家井出，

14 舜遂奔耕歷山。 後聞米貴，將來與 (於) 異 (冀) 都而出米 (糶)[14]，乃見

16 後母就舜買米。 舜見父母，密與其錢及米置於囊中。

18 如此數度，瞽疑是舜。 遂往都市，高聲喚云[15]，「子

20 之語聲似吾舜子。」 知是父[16]，遂撥人向父而哭，以舌舐

21 眼，眼得再明。 其詩曰

（舜子變）

25 後妻既被瞽叟容許設計，不經旬日之間設得計成，

26 白瞽叟曰，「妾見廳前枯井三二年來無水，交伊舜子

27 淘井，把取大石押[17]死。」 瞽叟報言娘子，「娘子雖是女人，設計大

---

[11]この詩に歌われている故事は本來インドの昔話であるようだ。『世界昔話ハンドブック』（稲田浩二、三省堂、2004）「第二部 世界の代表的昔話――あらすじと解說」「インド」の部に「二羽の雁と亀」として紹介される。また、義淨『根本說一切有部毘奈耶』卷第二十八「違惱言教學處第十三」や康僧會譯『舊雜譬喻經』卷下、『五分律』卷第二十五「第五分初破僧法」にも口禍を戒める比喩譚として使われている。さらに、P.2129 に同材料の詩がみえる。ここに、錄文を記す。

海中有神龜 兩鳥想共隨
遊依世間故 差眾人不知
道鳥銜牛糞 口稱我且歸
不能謹口舌 雹煞老死屍
敢上神龜一首

[12]本資料の同定については後述するが、ここでは假稱としての題目を用いる。

[13]特に意味のある場合を除き俗體字は正體ないし通行體に改める。以下同じ。

[14]本來「糶」の俗字「粜」1 字であったものを轉寫する際に 2 字に分けてしまったものであろう。

[15]「喚云」の間に「言」の字が塗りつぶし法で削除されている。

[16]「父」字下にもと「母」字あり。塗りつぶし法で削除。

[17]もと「壓」字を書き損じ，塗りつぶし法で削除のうえ右横に訂正字「押」を加える。

28 能精細。」 高聲喚言舜子，「阿耶見廳前枯井三二年來
29 無水。 汝若淘井出水，不是兒於家了事？」 舜聞淘井，心
30 自知之，便脫衫衣，井邊跪拜，入井淘泥。 上界帝釋密降銀
31 錢五百文，入於井中。 舜子便於泥灌中置銀錢，令後母象
32 兒挽出，數度錢訖。 上報阿孃言，「井中水滿錢盡，遣我出
33 著與飯一盤食者，不是阿孃恩德？」 後母聞言，於瞽叟
34 詐云，「是你怨家有言，『不得使我銀錢。若用我錢者，出來
35 報官，渾家不殘性命。』」
36 瞽叟既見後妻讒說，將謂是實，遂即嗔怒，便與[18](以) 大石
37 填塞舜子。 後母有女，把著阿耶，「阿耶若煞前家
38 歌 (哥) 子，交兒等甚處出頭？」 阿耶不聽其言，拽手與 (以) 石
39 填井。
……
44 阿耶既抛石填入井，帝釋變作一[19]黃龍，引舜通穴，
45 往東家井出，舜叫聲，上報。 恰值一老母取水，因云，「井中
46 是甚人乎？」 舜子答云，「是西家不孝子。」 老母便知是舜
47 牽拙 (挽) 出之。 舜即泣淚而拜。 老母便與衣裳串 (穿) 著身上
48 與食一盤喫了，報舜云，「汝莫歸家。 但取你親阿孃
49 墓去，必合見阿孃見身。」 說詞已了，舜即尋母。
（孝子故事／郭巨・閔子・王褒・向生）
50 郭巨者河內人也。 養母至孝。 時遇飢荒儉。夫妻爲人傭作。
51 每至喫食，減飯將歸，留餧老母。 巨有一兒，常奪阿婆飯食，
52 遂得不飽。 巨告妻曰，「兒死再有，母難重得。 你可煞兒存母
53 若不如是，母當餓死。」 遂令妻抱兒，巨自將鍬鑼穿地三尺
54 擬欲埋之，天愍其孝，乃賜黃金一釜并一卷。 卷文詞曰， 金
55 賜孝子。官不得侵，私不許取。 詩曰，郭巨專行孝養心，
56 時年飢儉苦來侵，每被孩兒奪母食，生埋天感賜黃金。
57 閔子者嘉夷國人也。 父母年老竝皆喪明。 閔子晨夕侍
58 養無闕。 常著鹿皮之衣，與 (以) 鹿群爲伴，擔瓶取水，在
59 鹿群中。 時遇國王出城遊獵乃見澗下有鹿群行，
60 遂王張弓射之，悟 (誤) 中閔子。 閔子失聲號叫云，「一箭煞三人。」
61 王聞之有人叫聲，下馬而問。 閔子答言，「父母年老，

[18]もと「与」。繁體字に統一する。以下同じ。
[19]「一」字下にもと「老」字あり。塗りつぶし法で削除。

62 又俱喪明。 侍養無人，必應餓死。」 語了身亡。 詩曰，
63 閃子行孝事親 不恨君王射此身 父母年俱失兩目
64 誰知一箭煞三人
65 王褒者魏郡人也。 養母至孝。 母後命終，日夜培 (陪) 墳，墳側
66 有松柏樹。 褒若向墳啼哭，其樹即之，變色枯枠 (忰)，不同
67 常日。 母生存之日，常怕雷驚。 褒每聞雷聲，即便奔赴
68 墓所，告曰，「褒今在此。 願孃勿驚。」 詩曰，
69 王褒慈母怕雷聲 每至春間不得寧 及至百年亡沒
70 後 抱墳猶怕阿[20]孃驚
71 向生者河內人也。 慈母年老，兩目俱盲。 時遇賊寇相陵。 向
72 生遂被討征。 新婦在家，向生 (來)[21]壓 (厭) 賤，好食自飡，麤[22]食將與向母。
73 向母[23]自嗟嘆云，「不種善因，受此艱苦。」 新婦大怒，乃取豬糞和
74 食與飡， 又更罵辱。 天見不孝，降雷霹靂至死。 又書
75 背上云，「向生妻五逆。天雷霹靂打煞。阿家兩目再明。」 詩曰
76 向生養母值艱危 被討邊疆未得歸 新婦家中行不孝
77 天雷霹靂背書之
（以下、下記同行 1 文を含め墨色が異なる）
77 向生妻逆天雷打死
（舜子故事および舜子變の韻文部）
78 詩曰瞽叟填井自目盲 舜子從來歷山耕
79 將米糞都逢父母 以舌舐眼再還明 又詩曰
80 孝順父母感于天 舜子淘井得銀錢 父母抛石壓舜子
81 感得穿井東家連

改めて注意したいのは書寫狀況である。つまり、まず「舜子孝子故事」が書かれ“其詩曰”としながら韻文は提示されず、續けて「舜子變文」の一部が書寫され、その後「舜子孝子故事」と同類の「孝子故事」が書寫された後に、墨色が變

[20]「阿」字下にもと「耶」字あり。塗りつぶし法で削除。

[21]「向生」のままでは讀めない。おそらく「向來」と書くつもりが、前後にみえる人名にひかれて誤ったものと思われる。「嫁はもともと貧しいことを嫌っており、（向生が不在になったので）ごちそうは自分が食べ、粗末な食事を向の母 (姑) に與えた」と讀みたいところである。

[22]もともと「好」字であるが、横に「麤」の俗體字を書き添える。塗りつぶしによる削除はないが、削除する意圖がありつつ、前部分の文字の亂れにより、判斷できなかったようである。

[23]もと「二」字の横に反復記號が添えられている。しかし、「二二」では意味をなさない。これは、行の頭の反復記號を 2 度繰り返してあった元の資料を書き寫す際に、最初の記號を「二」字であると見誤ったことによる誤りであろう。この書寫狀況から、本資料は他の資料を轉寫した可能性があることを改めて確認できる。

わりおそらく同時に書寫されたのではないだろうと思われる筆で「舜子孝子故事」の韻文が書寫されている點である。この狀況は、『敦煌變文集』（人民文學出版社1957）出版の當初から注目されてきたように、同じ韻文が「舜子至孝變文」および「孝子傳」[24]中の舜子故事に重複して見られる點を解明する大きなヒントを我々に與えてくれる。

三、關連資料との比較

すでに「舜子至孝變文」「舜子孝子故事」といった假稱をつけているが、改めて資料の内容について同定作業をしておく必要があろう。錄文3のうち本稿で中心に檢討する「舜子至孝變文」「舜子孝子故事」について關連資料との比較を以下に行う。まず、錄文25～49行について、P.2721Vと比較したところ次のようである。太字部は資料間の異同を示す。例えば、25行目について羽039Vに「後妻既被瞽叟容許設計」の10文字が認められるがP.2721Vにはなく、また羽039Vでは「之間」となっているところが、P.2721Vでは「中間」となっているなど、相互に異同がみられる部分をすべて太字とする。

行数	羽039V	P.2721V
25	**後妻既被瞽叟容許設計**，不經旬日**之**間，設得計成，	不經旬日**中**間，**後妻**設得計成，
26	**白瞽叟曰**，「妾**見**廳前枯井三二年來無水，交伊舜子	「妾廳前枯井三二年來無水，交伊舜子
27	淘井，把取大石**押**死。」瞽叟報言娘子，「娘子雖是女人，設計大	淘井，把取大石**填壓**死。」瞽叟報言娘子，「娘子雖是女人，設計大
28	能精細。」高聲喚言舜子，阿耶**見**廳前枯井三二年來	能精細。」高聲喚言舜子，「阿耶廳前枯井三二年來
29	**無**水。汝若淘井出水，不是兒於家了事？」舜聞**淘**井，心	水。汝若淘井出水，不是兒於家了事？」舜聞**濤**井，心
30	**自**知之，便脫**衫**衣，井邊跪拜，入井**淘**泥。上界帝釋密降銀	**裏**知之，便脫衣**裳**，井邊跪拜，入井**濤**泥。上界帝釋密降銀
31	錢五百文，入於井中。舜子便於泥灌中置銀錢，令後母**象**	錢伍佰文，入於井中。舜子便於泥鐏中置銀錢，令後母
32	**兒**挽出，數度**錢**訖。上報阿孃言，「井中水滿錢盡，遣我出	挽出，數度訖。上報阿**耶**孃，「井中水滿錢盡，遣我出

[24]『敦煌變文集』所收の「孝子傳」が「孝子傳」でないことは後述する。

33	著與飯一盤食者，不是阿孃**恩**德？」後母聞言，於瞽叟	著与飯一盤食者，不是阿孃**能**德？」後母聞言，於瞽叟
34	詐云，「是你怨家有言，『不得使我銀錢。若用我錢者，出來	詐云，「是你怨家有言，『不得使我銀錢。若用我**銀**』錢者，出來
35	報官，渾家不殘性命。』」	報官，渾家不殘性命。』」
36	瞽叟**既見後妻讒説，將謂是實，遂即嗔怒，便**與（以）大石	瞽叟**便即**与（以）大石
37	填塞**舜子**。後母有女，把著阿耶，「**阿耶若**煞前家	填塞。後母有**一**女，把著阿耶，「煞**却**前家
38	歌（哥）子，交兒**等**甚處出頭？」阿耶不聽**其言**，拽手**與（以）石**	歌（哥）子，交与甚處出頭？」阿耶不聽，拽手
39	**填**井。	**埋**井。
44	**阿耶既抛石填入井**，帝釋變作一黃龍，引舜通穴，	帝釋變作一黃龍，引舜通穴，
45	往東家井出，舜叫聲，上報。恰值一老母取水，**因**云，「井中	往東家井出，舜叫聲，上報。恰值一老母取水，**應**云，「井中
46	是甚人乎？」舜子答云，「是西家不孝子。」老母便知是舜	是甚人乎？」舜子答云，「是西家不孝子。」老母便知是舜
47	牽**拙**（挽）出之。舜即泣淚而拜。老母便與衣裳串（穿）著身上	牽**挽**出之。舜即泣淚而拜。老母便与衣裳串（穿）著身上
48	與食一盤喫了，報舜云，「汝莫歸家。但取你親阿孃	与食一盤喫了，報舜云，「汝莫歸家。但取你親阿孃
49	墓去，必合見阿孃**見**身。」說詞已了，舜即尋**母**。	**墳**墓去，必合見阿孃**現**身。」說詞已了，舜即尋**覓**

異同を示す太字部分はあまり多くなく、基本的に差異はないと考えられる。P.2721V は巻末に“舜子至孝變文一卷”および“天福十五年歲當己酉朱明蕤賓之日莫生拾肆葉寫畢記”の題記があり、文體が如何様であれ、書き手は「變文」を書寫したという意識で書き上げた資料である。よって、錄文 25～49 行については『舜子至孝變文』の一部が書寫されていると同定できよう。

錄文 11～21 行については、關連資料として P.3536 と S.389 がある。對照比較した結果を以下に示す。3 資料のうち相互 1 か所についてでも異同があれば、やはり前掲と同じく異同部分を太字で示す。下記對照表から、異同について羽 039V と P.3536 は同一、S.389 が異なる部分が多く、本資料は P.3536 とほぼ一致することがわかる。

行数	羽039V	P.3536	S.389
11	**昔**舜子者**異**（冀）邑人也。早喪慈母，**瞽**取後妻。妻譖其夫，	**昔**舜子者**異**（冀）邑人也。早喪慈母，**瞽**取後妻。妻譖其夫，	舜子者**冀**邑人也。早喪慈母，**獨養老父**，**老父名瞽瞍**。**父**取後妻。**後**妻譖其夫，
12	頻**欲**煞舜，令舜濤井，以石壓。 **帝釋照見**，東家井出，	頻**願**煞舜，令舜濤井，以石壓**之**。 **帝釋照見**，東家井出，	頻**欲**煞舜，令舜濤井，與石壓**之**。 **孝感於天**，**徹**東家井出，
14	舜遂奔耕歷山。 後聞米貴，將來與（於）**異** (冀) 都而出米（糶），乃見	舜遂奔耕歷山。後聞米貴，將來與（於）**異** (冀) 都而出來（糶），乃見	舜遂奔耕歷山。後聞米貴，將朱（來）**冀**都而粜，乃見
16	後母，就舜買米。舜**見父**母，密與其錢**及米**置於囊中。	後母，就舜買米。舜**見父**母，密與其錢**及米**置於囊中。	後母，就舜買米。舜**識是**母，密與其錢置於囊中。
18	如此數度，**瞽**疑是舜。遂往都市，高聲喚云，「子	如此數度，**瞽**疑是舜。遂往都市，高聲喚云，「子	如此數度，**到家具說上事**，**瞍**擬是舜。**令妻引手**，遂往都市，高聲喚云，「子
20	之語聲似吾舜子。」知是父，遂撥人向父而哭，以舌舐	之語聲似吾舜子。」知是父，遂撥人向父而哭，以舌舐	之語聲似吾舜子。」**舜**知是父，遂撥人向父**包頭**而哭，與（以）舌舐
21	眼，眼得再明。**其**詩曰	眼，眼得再明。**其**詩曰	**其**眼，眼得再明。**市人見之无不驚怪**。詩曰

問題の韻文部分については、下記の通り、關連資料3種とほぼ同文とみて良かろう。太字部分は前掲と同様、異同のある個所である。

行数	羽039V	P.2721V	P.3536	S.389
78	詩曰 瞽叟填井自目盲 舜子從來歷山耕	**其**詩曰 瞽**叟**填井自目盲 舜子從來歷山耕	**其**詩曰 瞽**叟**填井自目盲 舜子從來歷山耕	詩曰 瞽**瞍**填井自目盲 舜子從來歷山耕
79	將米冀都逢父母 以舌舐眼再還明 又詩曰	將米冀都逢父母 以舌舐眼再還明 又詩曰**者**	將米冀都逢父母 以舌舐眼再得明 又詩曰	將米冀都逢父母 與舌舐眼再還明 又詩曰
80	孝順父母感于天 舜子淘井得銀錢 父母抛石壓舜子	孝順父母感于天 舜子濤井得銀錢 父母抛石壓舜子	孝順父母感于天 舜子濤井得金銀 父母抛石壓舜子	孝順父母感爲天 舜子濤井得銀錢 父母抛石壓舜子
81	感得穿井東家連	感得穿井東家連	感得穿井東家連	感得穿井東家連

四、變文と孝子傳

次に、舜子變文と「孝子傳」の關係について考察してみよう。檢討するに先立って、『敦煌變文集』所收の「孝子傳」の問題點を明らかにしておく。まず、『敦煌變文集』では數種の資料を内容にしたがって混在させるかたちで整理してしまっている。また、いずれの原資料にも「孝子傳」という題は見られず、ありていに言えば、敦煌本『孝子傳』なる資料は存在しないのである。

よって、原資料に立ち戻って再整理する必要があるのだが、『敦煌變文集』所收「孝子傳」の基づく資料は 2 種に分けられる。つまり、最後の部分に注目すれば、

A　出～　（出典を記すもの）
B　詩曰～（詩でまとめ終わるもの）

の 2 つの型に分けることが出來る[25]。この基準で、『敦煌變文集』が基づいた關係資料を分けると、

P2621	A 型	
P3536	B 型	（閃子、舜、向生、王褒[26]）
P3680	B 型	（王褒、閃子）
S389	B 型	（郭巨、舜、向生）
S5776	A 型	

となる。羽 039V と重なる資料は 3 で述べたとおりである。當然 B 型との共通點が大きい。A 型は P2621 および S5776 共に王三慶氏が類書『事森』であると比定したように、類書であり、『孝子傳』としてしまうのは、問題があろう。別に扱うべき資料である。ここで再度確認すべき重要な點は、前述のとおり羽 039V および B 型を相互比較した結果、本文の異同は見受けられるが、韻文部（七言詩）については同音字による書き換えなどを除き、ほぼ異同がないということである。

さて、では所謂「孝子傳」との關係を檢討してみよう。黑田 2007 に現存の「孝

[25] この分類は、王三慶 1989 では A 型を「類林系統」B 型を「散韻合體系統」とする。当該論文の該当箇所を引用すれば:

如果把類林系統的類書和這種散韻合體的系統, 加以比較, 即可以看出兩者之間的不同, 類林系統猶存類書舊式, 並逐漸脫離傳統類書的範疇, 進入通俗化的領域中。……

至於散韻合體系統, 敘事取材源自通俗類書, 不需說明原典出處, 代之以七言詩句作結。這種散韻文體的結構, 乃為當日俗講經文流行後的常見體式。俗講的内容也由佛經進而講史及講時事等過渡作品, 以至於舜子一則, 其敘事部分到了「舜子變」, 已敷衍成長篇敘事, 可是結尾的兩首七言四句詩, 却仍然被「舜子變」照單襲用。這種過渡的痕跡, 極為清晰, 它較「類林」系的通俗類書更接近廣義的「變文」, 把它輯錄在輯錄在「敦煌變文集」中是無可厚非的。(193 頁)

[26] 羽 039V と重複する人物を出現順に列擧記載する。以下同じ。

子傳」逸文についての詳細な調査結果がまとめられている。羽039Vにみられる「舜・郭巨・閃子・王褒・向生」について關連箇所を要約すると、

1．舜　『劉向孝子傳』からの引用として『法苑珠林』『廣博物志』『繹史』ほかに見られる。さらに『逸名孝子傳』として『三教指歸』成安注下、『覺明』注に引用がある（黑田2007、132頁）。

2．郭巨　『劉向孝子傳』からの引用として同じく『法苑珠林』、『敦煌本北堂書鈔』など、さらに『宋躬孝子傳』として『初學記』『太平御覽』などに、『逸名孝子傳』として『蒙求』『白氏六帖』などに見られる。金澤文庫本『孝子傳』にも採られている（黑田2007、121-122頁）。

3．閃子　黑田2007に記載なし。

4．王褒　『逸名孝子傳』として『陳檢討集』にみえる（黑田2007、120頁）。

5．向生　黑田2007に記載なし。

以上から、あくまでも現存資料に關してではあるが、「古孝子傳」において閃子と向生の記述が見られないことがわかる。

まず、閃子であるが、これは本來佛典『剡子經』に基づくインド傳來の剡氏の故事であることからすれば「古孝子傳」に現れないのは當然である[27]。また、向生の故事は、現在その典故を敦煌文書以外の資料中に見つけられない。ただ類似の故事として、實母と姦通して實父を殺害し、その報いに雷に打たれて體に「因縁」と記される〈齊何君平〉の故事と盲目の姑にミミズを食べさせて雷雨にさらわれ空から落ちてきた後白い犬の頭に變えられてしまった女の故事〈隋婦養姑〉が共に前後して『法苑珠林』第四十九にみえる[28]。さらに『法苑珠林』[29]第六十二感應

[27]黑田2007では、敦煌本孝子傳の兩卷（P3536V, P3680V）に舜、王褒などと竝んで剡子が登場することを指摘し、後世の二十四孝が形成されつつあることの徵證に他ならず、同時に、孝子傳、孝子傳圖の轉換、終焉を表すものとする。（456頁）

[28]［唐］釋道世『法苑珠林』卷第四十九〈感應緣〉

「齊何君平」

齊何君平，相州人。母裴氏少年誕平，後更不孕。父母憐愛劇同眼目。父母憐重，平長大，不多教學問，縱暴自游。年至二十，父母憐愛，不聽別室。父因使出行，經年方還。父行去後，母憐共私。父還到舍，共母殺父，埋之後園，誑他道：父未還。天雷霹父屍出，然後霹平身，身上具題因緣。親隣告官，聞徹天聽，敕：殺裴氏暴屍，不聽收理　(右見李歸心錄也)。

「隋婦養姑」

隋大業中河南人，婦女養姑不孝。姑兩目盲，婦以蚯蚓爲羹，以食之。姑怪其味，竊藏一臠留以示兒。兒還見之，欲送婦向縣，未及而雨雷震失其婦，俄而婦從空落。身衣如故而易其頭白狗頭，言語不異。問其故。答云：以不孝姑爲天神所罰。夫以送官。時乞食於市。後不知所在　(右一驗出冥報記)。

[29]［唐］釋道世『法苑珠林』卷第六十二「感應緣略引」一十五驗

縁略においては、「舜子」「郭巨」の 2 項が取り上げられており、これらの狀況は本來孝子故事であったものが佛教に取り入れられる際に靈驗譚として翻案されていることを示している。

よって、羽 039V および『敦煌變文集』に「孝子傳」の資料として取り上げられた王三慶 1989 の所謂「散韻合體系統」諸資料は、「孝子傳」ではなく從來すでに人口に膾炙していた孝子故事が翻案された佛教靈驗譚であると考えるべきである。

五、まとめ

同じ七言詩が何故 2 種類の異なる資料に出現するのかという從來の疑問は、羽 039V においてなぜ唐突に 2 首の詩のみが最後に置かれたかという疑問とともに、ほぼ解決の絲口を見出すことが出來る。つまり、王三慶 1989 の用語を借りるならば「類林系統」から韻文を含む「散韻合體系統」に、そして「變文」に、さらに書き込めば目連變文などの韻散混交體（狹義の「變文」）にという流れを想定すれば自然に了解できよう。

舜子變文の書き手はかなり口語性の強い言語で書寫しており、韻文は「散韻合體系統」資料を踏襲したと考えられる。舜の民間故事の起源は湯谷 2004 の指摘によればかなり早期から認められる[30]。が、變文の題材として捉えた場合、それは佛教色の濃いものに書き改められる必要があった。中國撰述の目連經などの場合と異なり、民間故事を題材とする場合は既に人口に膾炙しており、民衆をひきつけうる思い切った改編は容易ではなかったと想像される。また本來繼子いじめや近親相姦といった題材は佛教とは相容れない要素である。地獄めぐりや降魔變文に見られるような技比べといった見せ場、聞かせ場は畢竟望めなかったであろう。舜子變文が狹義の變文としての體裁を整えるまでに到らなかったと考える所以である。

本稿は奇しくも倉石 1939 で言及されている下記の推測を檢證する結果となった。

「舜子有事父之感」

舜父有目失, 始時微微, 至後妻之言, 舜有井穴乏。舜父抂家貧厄邑市而居。舜父夜臥夢見一鳳凰, 自名爲雞, 口銜米以哺已, 言雞爲子孫, 視之是鳳凰。黃帝夢書言之此子孫當有貴者舜占猶也比年糴稻, 穀中有錢舜也。乃三日三夜仰天自告過因, 至是聽常與市者聲。故二人, 舜前舐之目, 霍然開見舜。感傷市人大聖至孝道所神明矣。

「郭巨有養母之感」

郭巨河内温人。甚富。父没分財二千萬爲兩分弟, 已獨取母供養住。自比隣有凶宅, 無人居者。共推與居無患, 妻生男, 慮養之則妨供養, 乃令妻抱兒, 已掘地, 欲埋之。於土中得一釜黃金, 金上有鐵券曰: 賜孝子郭巨。

[30]氏は前掲書において、畫像石資料および北魏時代の漆棺資料を用いて「少なくとも北魏時代（三八六－五三四）以前には、敦煌本『孝子傳』や變文の一部と共通する資料が成立していたことが明らかになる」（100 頁）と述べる。

> 飜って前掲の舜の逸話に於てやはり「變文」の題が襲用されてゐる處を見ると、少くともこの場合に於ては變文より發達したる宗教的語り物が、支那固有の童話をも惹き込んだらしく思へる。如何に少く見積つても**當時は宗教的語り物の方が優位に在つた**のでないと、この關係が解けそうに無い。(134 頁下段)　……　われわれは**先づ固有の語り物が佛教家の變文に壓到された時代を想像する。次に再び固有の物語が變文の袖に隱れてそろそろと其改革された、時代の兒としての姿を現す、それは「舜子至孝變文」に於て眼のあたり認めることが出來る。**かの「孝子董永傳」に至つてはよほど脫化の傾向さへ見える。而して最後に再生の語り物たちが「變文」や「緣起」の舊套をかなぐり捨てて、民衆の間に躍り出す、それはかの灌園耐得翁の都城紀勝や周密の武林舊事等に「小說、說公案、說鐵騎兒、說經、說參請、講史書」として竝列されてゐるのでも知れ、而かも啻に對等の地位を占むるのみならず、筆頭たるの人氣を博してゐるに至つては實以て凄まじい。(135 頁下段〜136 頁上段：太字は筆者による。)

「變文より發達したる宗教的語り物」という認識や「童話」の定義などに於いて今の一般の了解と些か乖離する点もあるが、太字で強調した部分に述べられている点は、従来より人口に膾炙していた「舜子孝子故事」が佛教霊験譚に翻案され、さらに狭義の「變文」に書き換えられようとしつつ十分に果たせないまま、廣義の「變文」と認識された様子を述べたものとして捉えられよう。羽 039V はまさしくその過程を証明する史料であるといえる。、半世紀以上を隔た現在においても色あせない先人の洞察力に改めて敬意を示し、當時目にすることのなかった新資料に於いてここにその推測の正確さを實證できたことを幸いとする。

使用圖錄

『敦煌祕笈』影片册一、杏雨書屋、2009 年

『敦煌祕笈』目錄册、杏雨書屋、2009 年

參考引用文獻

倉石 1939　倉石武四郎「目連變文紹介の後に」『支那學』第 4 卷第 3 號、432-440 頁

王三慶 1989　「《敦煌變文》中的〈孝子傳〉新探」『敦煌學』第 14 輯、189-220 頁

Mair 1989　Victor H. Mair, *T'ang Transformation Texts*, Harvard University Press, Cambridge

黑田 2001　黑田彰『孝子傳の研究』、京都：思文閣出版

―― 2007　黑田彰『孝子傳圖の研究』、東京：汲古書院

湯谷 2004　湯谷祐三「新出敦煌孝子傳資料と變文の關係――羽田記念館所藏「西域文獻資料寫眞」所收孝子傳資料をめぐって」『同朋大學佛教文化研究所紀要』第 23 號、87-104 頁

荒見 2010　「舜子至孝變文類寫本の書き換え狀況から見た五代講唱文學の展開」『アジア社會文化研究』第 11 號

顏廷亮 1993　『敦煌文學概論』、蘭州：甘肅人民出版社

（作者は関西大學外國語學部教授）